

箱館タウン

ウォーターフロントの保存と再生

亀谷 隆



「旧青山漁家」
大正8年、小樽祝津に建築された鱈漁場の元
場で、北海道開拓の村に移築。
版画・谷口二郎（札幌）

★異業種5人が焼酎を飲みながら

昭和59年（1984）の春頃、異業種集団のカルチャー・トラスト“KUMA・PRO”が、函館をモデルとして街づくりの構想を提案することにした。

異業種の集団であるだけに、街づくりには多様な意見が飛び交い、ある時は夕方から夜中まで焼酎の瓶が二、三本空になるほど会話が続けられた。

このKUMA・PROなる集団は、昭和55年（1980）に5人で結成され、時折集まっては時の社会問題を酒の肴さかなにして、互いの思いや考えを理解して楽しんでいた。

結成されて3年くらい過ぎた頃、「そろそろ、この集団も生産性のある活動ができそうなので、どこかの街を選んで街づくりの構想を検討したら」との提言があり、函館市を選び、毎週一、二回の検討会を、場末の居酒屋で開いた。

★異国文化の歴史と景観を生かす

安政年間に天然の良港として開港した函館は、開拓使の本庁が札幌に移されてからも、北海道を代表する都市として機能していたが、時代とともに北海道の内陸開拓が進み、主要な都市として機能が衰退した。

しかし、しょっぱい川と称される津軽海峡を往来する船舶によって交流された文化や人は、函館に定着しており、札幌を中心とする開拓がアメリカ合衆国を模範としたとすれば、函館はヨーロッパ諸国を模範としたとも言え、その証しは、カソリック教の教会、洋式の五稜郭城など街並の景観や人柄に残され、それは今でも見ることができる。

そんな函館の街並を保存し、再生させることができれば、札幌とは異なる魅力ある個性的な都市となるとし、検討会の最初は、好き勝手の函館のイメージについて語り合った。

構想は約1年ほどの月日をかけ、『一異国情緒と海峡ロマンー「箱館タウン」ー歴史ロマンの街づくり構想提案書』として函館市長に送付した。後日、市長より提案に対しての礼状が届き、提案側として早期に実現することを期待した。

構想の基本コンセプトは、「多元複合型のシステムを再開発手法の中にとり入れ、その形成過程には、函館らしさの源泉となる歴史とこれに培われた生活文化を再生させる。同時に経済圏、生活圏との複合させるため、当該住民の参加による開発方式をとり、民間活力のエネルギーを投入する」とした。

さらに、計画の基本方針は、「古い歴史を有する函館市は、北海道の表玄関として栄えてきた。提案する計画は、市内西部地区から国鉄函館駅に至旧海産商街と、海に面した倉庫街を有効に活用し、異国情緒あふれる空間と施設を対象として整備しようとするものである」とした。

計画には、駅前朝市、連絡船広場、海港レストラン、マリントワー、クラフトセンター、箱館横町、海峡博物館などの施設を具体的な完成予想図などで示した。

★青函博覧会を契機に整備

この提案をしてから2年くらい経った頃、北海道と渡島支庁の職員から電話で、「昭和63年に青

函トンネル開通を記念して博覧会を函館市と青森市で開催する予定なので、函館市に提案した西部地区のレンガ倉庫群を整備したいと考えているが、どのような方法で整備したらいいだろうか」との問い合わせがあったので、「電話ではすぐに返答できないので、お会いして話を聞きましょう」と返答し、後日面談することにした。

面談での大きな課題は整備するための予算で、提言として「レンガ倉庫群は大方、金森倉庫であり、所有などの事情は渡辺家がよく知っている。整備資金については、商工会議所に尽力して頂いたらいかがですか」と話し、面会する数人についても紹介した。

その後、西部地区の倉庫群が一棟、二棟と整備され、平成元年（1989）に国重要伝統的建造物群保存地区として選定された。

KUMA・PROが西部地区を整備する際に注目していた建物は、旧郵便本局庁舎で、明治44年（1911）に建築された洋風レンガ建造物で、昭和36年（1961）に民間に払下げられ、昭和55年（1980）、北海道や函館市が北洋資料館として転用しようと計画したが、構造上の難題から転用を断念し、その後、地元の工芸組合が「ユニオンスクエア明治館」として活用し始めており、再生への中核をなす施設とした。

★都市は文化・改良主義で？

19世紀後半にヨーロッパでの産業革命によって都市は大きな改革を余儀なくされ、都市計画という言葉が生まれた。

日本に定着したのは大正初期で、計画は進歩主義と文化主義との二大思想で、日本は理性を重んじ、非合理的、因習的なものを否定した進歩主義を大正8年（1919）の都市計画法に取り入れ、都市を住宅、商業、工業とに分類したゾーニングでの都市開発が行われた。

しかし、昭和20年（1945）代になり、歴史、文化、地方を否定した進歩主義の欠陥が明確になり、昭和25年（1950）代、文化主義の都市が見直され、都市景観派・経験主義が提案されるようになった。

主義の基本は「人びとが日々経験している景観の視点から都市づくりを考えるべき」とし、既存の都市を否定せず、問題あるところだけを改良す

る改良主義の立場に立った。

しかし、この主義にも親しみやすさを重視するため、表面的で大衆的な計画になりやすいとか、感性や経験を重視するあまり、感覚を楽しませる快樂主義に陥り、都市が遊園地化していくのではないかという問題があるとも言われている。

明治から昭和初期頃まで賑わっていた西部地区は、いま、多くの市民をはじめ道内外の観光客にとっても函館を知る歴史資源として親しまれ、平成2年（1990）、西部地区に居住する人びとや所有者らによって「函館市伝統的建造物群保存会」が結成され、平成16年（2004）には北海道遺産構想推進協議会が主催した「北海道遺産」の一般公募による選定で推薦された。

さらに、平成19年（2007）2月には、古都保存法施行40周年記念事業として、財団法人古都保存財団が全国募集した「美しい日本の歴史的風土100選」の応募698件のなかから100選の一つとして選ばれた。その評価は「明治・大正期の洋風建築、倉庫、教会などが坂道の景観と相まって異国情緒をかもし出している」とされた。

この文を綴りながら、改めて函館市に提案した「箱館タウン」構想では、既に形成されている街を“街づくり”という大上段に構えないで、街を変える“街かえ”とか、街を直す“街なおし”とか“街化粧”という意識の方が、より整備しやすかったのではと反省している。



profile

亀谷 隆 かめや たかし

1943年函館市に生まれる。武蔵野美術大学卒業。公立中学校教諭、市立函館博物館、北海道開拓記念館に勤務し2006年退職。北海道大学、北海道東海大学講師を歴任。現在、北海学園大学講師（博物館学）、特定非営利活動法人公共環境研究機構理事長、北海道博物館協会会員、北海道北方博物館交流協会評議員、地域文化開発研究会主宰など。